No.68 contents

2　第100回記念二科展開催　100回記念展を迎えて
3　伝説の洋画家たち 二科100年展　ときめく
4　〈絵画〉総評
5　〈絵画〉会員になって―制作の視点
6　〈絵画〉受賞作品―制作の視点　受賞者一覧
7　賞のことなど
8　〈絵画〉第100回記念賞作品寸評
10　〈彫刻〉総評　会員になって―制作の視点
11　〈彫刻〉受賞作品―制作の視点
12　〈彫刻〉受賞作品寸評
13　新生二科を標榜して
14　event memo（授賞式・作品研究会・講演会・ギャラリートーク・ナイトミュージアム）
15　4部会員有志コラボ展示報告　百周年記念実施事業
16　支部だより（新潟巡回展報告・記念祝賀パレード・巡回展日程）
18　デザイン部・写真部　審査会にて　春季二科展日程
19　訃報　春季二科展選抜出品予定者
20　チャリティー報告・二科ショップ　ベストセレクション展　事務局だより　編集後記

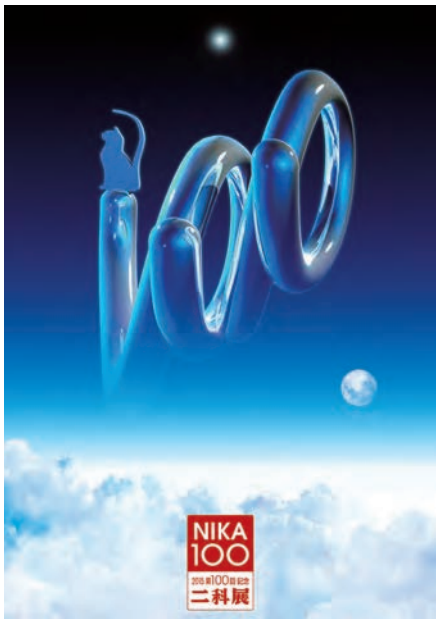
二科

秋季

発行人：田中 良　発行：公益社団法人 二科会
http://www/nika.or.jp/　TEL：03-3354-6646
E-mail：nika@nika.or.jp

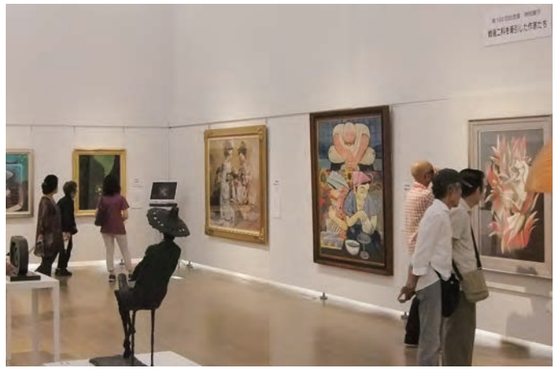
NIKA

PAINTING 絵画　SCULPTURE 彫刻　DESIGN デザイン　PHOTOGRAPH 写真

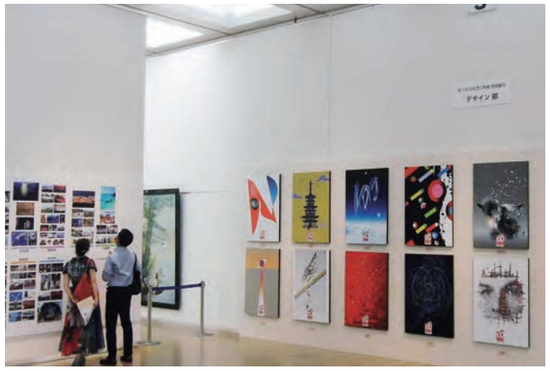


展示1室

会場入口



特別展示　4室



写真部・デザイン部特別展示　5室

第100回記念二科展 テープカット

100TH MEMORIAL
NIKA ART EXHIBITION 2015

100回記念展を迎えて

田中　良

待望の第100回記念二科展が、九月二日、国立新美術館で絵画、彫刻、デザイン、写真の緊密な協力のもと、盛大に開催されたことは、誠に意義深く、有難く感動しました。

前半は台風等の影響を受け心配でしたが、天候回復に伴い盛況で、入場者は十万二千余となり、これも宣伝効果と、やはり二科会という伝統のなせるわざと痛感した次第です。

また出品者御一同の作品も力作が多く活気を呈し、特別展示室の「戦後二科を牽引した作家たち」の作品を陳列出来たことと、デザイン部・写真部の過去、現在、未来の作品を展示出来たことも好評であった。

又東京都美術館、大阪市立美術館、石橋美術館と産経新聞社の共催で、美術史の中でも著名な作家約百名を選び、「伝説の洋画家たち 二科100年展」を開催出来たことは実に感動。吉野毅委員長のもと、各委員会の担当理事、会員諸氏の御努力に厚く御礼致します。

尚、休憩室を利用しての初の試み、「猫」をテーマの4部合同のコラボ展も大盛況で、行った甲斐があった。恒例のチャリティ小品展も各部の厚い協力で、年々成果を上げ、社会福祉に貢献出来た。

さて有終の美を飾り、101回展へと展望するに、現代の―或いは未来の絵画についての思考を、手段は様々だが深く語り合ってみたい。何故ならば、現代美術ではコンピューターでの制作が多く、その大きな流れになろうとしている感もあるが、今回の都美術館での「伝統の洋画家たち 二科100年展」を鑑賞した多くの方の感想は、現代美術といわれている作品より、心に残る印象が遥かに強いという評を多く聞く。それは何故か？これから若い世代の画家志望者を育成する立場の私たち会員の宿題でもあり、反省点も残す。

最後に第100回記念展を成功に導き、陰に陽に奮闘した塙事務局長、安田会計、4部事務局の皆様に心から感謝致します。

伝説の洋画家たち 二科100年展　東京都美術館会場

第100回記念二科展祝賀会
乾杯　菅原常務理事

アトラクション
和太鼓パフォーマー〈無限〉

東京都美術館 記念講演会　田中理事長、吉野常務理事

イブニングレクチャー　松室常務理事

大阪市立美術館 講演会　田中理事長、伊庭常務理事

7月17日　オープニングセレモニー

伝説の洋画家たち　二科100年展

ときめく

宮村　長

白いボードの作品のエピソードを一つ、一つ、読みながら、一作、一作、会場を歩く。この作家がこんな絵を描いていたのか、新鮮な気持にさせてくれるのが多くて楽しい。まだ画学生時代の自分に戻って行っていることに気がついていないまま進む。知っている作家に出会う毎に、あの時の憧れが沸いてくる。興味が尽きることなくいつの間にか出口へ。淀井先生の作品「聖マントヒヒ」が出口に向って足を投げ出して座して居る。見事な落ちである。ユーモアに思わず微笑んでしまう。「再入場される方はここから」の看板に一階から再度見る。昔の日本は空気がきれいだったなあと感じる。静物画、人物画、特に風景画に於てそれを感じた。土の色が佳い、日本の風景には地道が合う。松岡正雄の「村の子供達」に感心した。安井曾太郎の「玉蟲先生の像」のデッサン力とデフォルメには降参った。それに鮮やかな色彩、未だに憧れる。先回の東郷青児の彫刻のデッサン力とデフォルメの魅力と感動を思い出していた。宮本三郎の「家族席」。娘の眼には確かに他の人とはちがった処を見ている。「描き度くないものをより多く描かなければならない運命」の父を見ている。そこまで感じ取れなかった。鑑賞者にも責任と能力が必要であるとドキッとした。林武の「本を持っている婦人像」の奥さんのエピソードも面白い。夢中になっている自分が快い。これは画学生の頃のトキメキだった。

大阪の内覧会にもう一度あの感激をと楽しみに行った。館内放送が「4時30分」を告げる。出口で関係者に問うた。すると、「金曜日でも東京のようには出来ません。ここでは、お客様には明るい間に来て頂いて、明るい間にお帰り頂くことになっております」と答が返ってきた…(笑)。

絵画部　総評

第100回記念二科展雑評　伊庭 新太郎

絵画部会員　審査室にて

私にとって病気の為、欠席したり中途退場したりし の5年間で、第100回記念展の評を書く資格もない と思うが、逆に第三者的な感想が云えると思うので、以下感想を述べてみる。

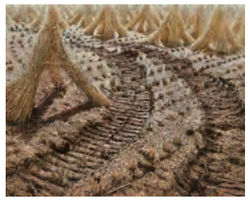
特別展示として二科を支えた画人の作品展が有った。特別展示会場を暗くし別にスポットを当て、作品保護を考えながらも大切な貴重品を陳列するに相応しい一室になっていた。それは一般の人達にとっても二科に所属する我々にとっても、この部屋で感じる背を走る雷光がそのことを証明していた。丁度現在の我々が100回展に力を込めて描いた数々の作品が、クリスマスリースのように中心にある特別室の回りを賑々しく飾り、よりこの一室を神々しく感じさせていた。東京都美術館で「伝説の洋画家たち 二科100年展」も同時期開催されているが、二科独自の特別展は記念展中の秀眉であると思われた。

第100回記念展の陳列はほぼ例年通り良くも悪くもなく陳列されてあった。特別展の部屋の替わりに彫刻室二室が絵画部に提供されており、この為例年より入選作が多かった分、何とか無事に陳列が出来ていた。二階展示室も三階展示室も例年通りであった。U35作品ばかりを展示した部屋で良く鑑賞していると茫々漠々たる思い、又は感覚が私を魅った。私のセンスとは違った今まで見ることのなかったセンスに漠然と浸らせられていた。そこには色彩、形態、技法、材料等々、私には大変独創的なものと感じられたのだ。アニメやテレビ、写真、様々な材料、技法等々の影響と捉えることも出来るが、私には何か違うセンスとしか感じられないのだ。こうした作品がもっと身近に判別可能であるようU35の中より会員が出ても良いのではと妄想していた。

他に四部コラボレーション展も記念展に軽やかさを与えていた。展示室も賑わい名案であったように思えた。楽しい小品が100回展を盛り上げていた。中でも理事長の作品や他会員の作品も平生とは違った魅力に満ち、記念展に花を添えていた。

審査風景

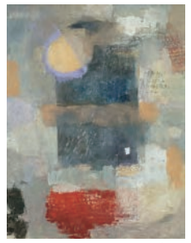
絵画部会場13室



郷陽　鈴木 三喜男

ジャズライブ2015Ⅲ
小林 豊弘

もう一つの世界へ―変化して―
伊藤 よし子



ムーンライト　石田 勝己

湯屋のビーナス(5)　明石 里美

黒の風景(Ⅱ)　山中 惇孝

アニバーサリー　山﨑 美恵子

時感15-Ⅳ　餅原 宣久

時は流れて2　野口 睦幸

花蛬蝣　錦木 眞葉

会員になって ―制作の視点

明石 里美

歩き出した一歩から、今日までの心象画です。やっと土台が出来た。太い柱を何本も建ち上げていく。自己磨きとの対峙が次の課題。

第83回 特選／第86回 会友推挙
第89回 会友賞／第100回 会員推挙

石田 勝己

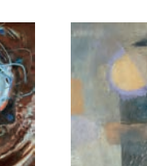
のどかで住み慣れた田園地域が年月の経過とともに、何処か物悲しく感じる。幼少の頃の原風景を強く画面に留めておきたい。

第69回 ローマ賞／第78回 会友推挙
第94回 会友賞／第100回 会員推挙

伊藤 よし子

色彩と曲線の絡みで全体のムーブメントを構成し、有機的息遣いを表現した私の世界。更に色幅を深めもう一つの世界を求めたい。

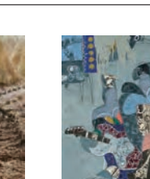
第73回 特選／第81回 会友推挙
第86回 会友賞／第100回 会員推挙



小林 豊弘

私の絵はジャズ。毎日ジャズを聴いて描く。聴いたままをキャンバスに。それをあの人に伝える。今年は音を少し変化させてみた。

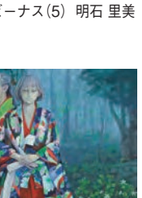
第90回 特選／第92回 会友推挙
第95回 会友賞／第100回 会員推挙



鈴木 三喜男

目にも留めない風景の中に、直接そこに人間がいなくても、人間が関わり合ってくる風景を描き、見る人に郷愁を感じてもらいたい。

第93回 特選／第95回 会友推挙
第97回 会友賞／第100回 会員推挙



錦木 眞葉

長く人物だけを描いてきた。人物よりもそれを取り囲む空気、気配みたいなものに関心があった。いつか画面から人物が消えても気配みたいなものが描けるだろうか―。

第68回 特選／第72回 会友推挙
第92回 会友賞／第100回 会員推挙

野口 睦幸

印象に残った風景をデフォルメし確かな形や線を模索し描き込んでいきます。メロディーが聴こえる心象風景を表現出来ればと思います。

第75回 特選／第83回 会友推挙
第92回 会友賞／第100回 会員推挙

餅原 宣久

少しずつ重ねていく絵具の層と層の間に，日々生きている時の実感を織り込み，普遍的な存在感のある平面の構築を目指しています。

第88回 特選／第93回 会友推挙
第95回 会友賞／第96回 二科賞
第100回 会員推挙

山﨑 美恵子

初の130号のキャンバスを前に眺めるだけの日が続いている。大きな作品は構図が難しい。会員になれて先生方に接する機会が増える事を思うと活力が湧いてくる。

第80回 記念賞／第84回 会友推挙
第97回 パリ賞／第100回 会員推挙

山中 惇孝

昼夜を徹して貨物列車は走る。その走行する姿のなかに色を見つけ線を走らす。「赤」、「白」、「黒」、その輝く美しさを制作の原点とす。

第76回 特選／第79回 会友推挙
第81回 会友賞／第100回 会員推挙

受賞作品――制作の視点

内閣総理大臣賞　コンポジション　F150　吉井英二

内閣総理大臣賞

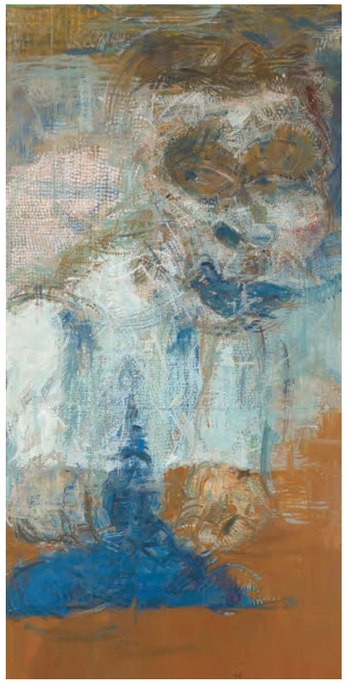
吉井 英二

この度の受賞はとてもうれしい。

一九五五年第40回展の初入選以来、四国の高知から休まずに出品できたのは、二科の魅力のおかげである。

三年前に敗血症を患って命の危機に瀕したが、病床でうわごとのように繰り返した「100回展までは」という強い思いで病状は回復した。

この100回展を通過点として、これからも内面の追求に軸足をおいて制作に励みたい。



東京都知事賞　それでも歩く人
324×162　齋藤賢司

東京都知事賞

齋藤 賢司

夏は冷奴、冬は湯豆腐、元気のないときはおかゆを、元気のあるときは豚カツを食べたくなります。そのときどきに、ほんとうに描きたいもの、心の奥の奥がこれだと認めるもの、それが目の前に出てくるまで描くのが僕の仕事です。

第100回記念二科展　受賞者

内閣総理大臣賞　吉井英二（高知）

文部科学大臣賞　吉田二郎（京都）

東京都知事賞　齋藤賢司（東京）

（絵画部）

二科賞
山下かじん（長崎）
吉田豊彦（長崎）
野平智広（鹿児島）
山下進弘（和歌山）

第100回記念大賞
吉金幸枝（東京）

パリ賞
田辺美穂子（滋賀）

損保ジャパン日本興亜美術財団賞
該当者なし

上野の森美術館奨励賞
石川由巳子（宮城）
前橋伸哉（東京）
山田雅子（岐阜）
山田祐二（新潟）
徳弘あずさ（高知）
高橋和平（宮崎）
川北美世子（神奈川）
沖永啓高（東京）
岩田一男（山口）
伊藤真理子（岩手）
伊藤須美（兵庫）
池田佐知子（富山）
石井晶子（神奈川）

会員賞
上野和子（兵庫）
鬼頭恭子（東京）
寺田眞（東京）
中川功（滋賀）
冨士谷隆（京都）
米田安希（鹿児島）

第100回記念賞
上野和子（兵庫）
鬼頭恭子（東京）
寺田眞（東京）
中川功（滋賀）
冨士谷隆（京都）
米田安希（鹿児島）

会友賞
上石直美（福島）
大岩万里子（東京）
太田広信（富山）
金子久子（愛知）
合田紘露胡（愛知）
篠原涼子（滋賀）
田中壽美（千葉）
塚本和美（福岡）
中島薫（新潟）

特選
石原琢二郎（鹿児島）
稲村博子（神奈川）
加持友子（滋賀）
倉橋榮子（神奈川）
倉本郁夫（広島）
河本恭加子（滋賀）
佐々木俊明（広島）
佐藤幸光（東京）
平林直哉（鹿児島）
福島菜菜（京都）
南満喜子（神奈川）
森井るみ子（京都）
康本節子（大阪）
吉村彩菜恵（石川）
若狭洋子（滋賀）

新人奨励賞
遠藤学（千葉）
中村百合江（東京）
羽根真実子（福島）
茂木拓（福島）

会員推挙
明石里美（東京）
石田勝己（滋賀）
伊藤よし子（愛知）
小林豊弘（神奈川）
鈴木三喜男（茨城）
錦木眞葉（石川）
野口睦幸（福岡）
餅原宣久（鹿児島）
山崎美恵子（佐賀）
山中惇孝（京都）

会友推挙
伊藤真理子（岩手）
岩田一男（山口）
大槻薫（茨城）
奥山嘉男（三重）
川北美世子（神奈川）
田村忠男（新潟）
辻田悦子（三重）
徳弘あずさ（高知）
中村紘子（東京）
新川久子（岐阜）
畑すづ子（三重）
的場五十彦（京都）
山田雅子（岐阜）
山田祐二（新潟）

会員推挙
工藤直（秋田）
正司強（広島）
林一平（石川）

会友推挙
篠木玲子（埼玉）
土屋賢次（群馬）
仲子亜未（静岡）
藤沢恵（埼玉）

（彫刻部）

二科賞
該当者なし

第100回記念大賞
林一平（石川）

ローマ賞
市川明廣（埼玉）

彫刻の森美術館奨励賞
来栖花（山形）

会員賞
二ノ宮裕子（東京）

会友賞
大塚邦博（東京）
服部多加志（東京）
本多紀朗（大阪）
山田美智子（神奈川）

特選
浜田修子（東京）
本多智雄（茨城）
町田至（山形）

第100回記念賞
森本諒子（山形）

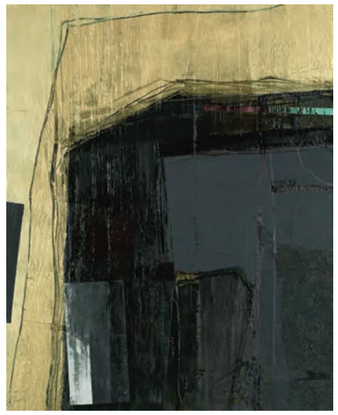
新人奨励賞
杉亮介（神奈川）

会員推挙
工藤直（秋田）
正司強（広島）
林一平（石川）

会友推挙
篠木玲子（埼玉）
土屋賢次（群馬）
仲子亜未（静岡）
藤沢恵（埼玉）

上野の森美術館奨励賞　いのちⅥ　F100
石川 由巳子

第100回記念大賞　青の記憶　F100
吉金 幸枝



二科賞　work-Fade　F100　山下 かじん

パリ賞　11時36分
F100　田辺 美穂子

賞のことなど

中原 史雄

よくなったと感じる作品が、例年より多くあり、審査が終わったあとも心地よさが残った。有難いことに、若い出品者が着実に増えていて、その表現が、二科展に新しい風を送ってくれる。第100回記念展の所為だろうか、ベテランのガンバリが目につき、自らの表現を、何とか拡げようとする心構えが伝わってきて嬉しく思った。二科展の魅力を高めるには、私たちやこの人達、つまり、古参の画家の奮起が不可欠なのだから。

主な受賞作は、二科賞、山下かじん。金地に黒、余分な要素を削ぎ落とし、明快でインパクトのある「Work-Fade」。第100回記念大賞、吉金幸枝。詩情を感じる抽象表現、浮遊するようなフォルムと空間の関係が快い「青の記憶」。パリ賞、田辺美穂子。色と形を響かせ、日常の一コマを軽快に表現。見事に作品化した「11時36分」。上野の森美術館奨励賞、石川由巳子。鳥の巣を描写的に、しかし、よく見ると独自のマチエールの上に、パステルで描き、地と空の関係もおもしろい「いのちⅥ」。作品ごとに表現が異なり、よい選考になったようだ。その他の受賞作で、ユニークなものを2、3あげると、会友賞、野平智広。不思議な世界を構築した「真実は目に見えないもの」。特選、石原琢二郎。粘っこさを感じる描写が魅力の「年々歳歳～流」。第100回記念賞、髙橋和平。シチュエーションが楽しい「2015画室Ⅲ」などが印象に残った。

国立新美術館の広い壁面に、毎年1200点を超える作品が展示され、その中に自分の作品が並ぶ。したがって、懸命に描くだけでなく、コンセプトやテーマを、どう伝えるかの工夫が求められるのだろう。

ところで、「伝説の洋画家たち　二科100年展」は、稀にみる素晴らしい展覧会だった。絵画の表現は、拡散しつづけて、理屈っぽさや難しさが価値観として罷り通る今日この頃、改めて、その真髄に触れる思いで鑑賞した。会場の最後の室に展示されていた、大沢昌助「褐色の像」、張り詰めた構成の中にユーモアがあり、観る側の心が和む。解説に、大沢は日頃から楽しんで作品を描いたとあった。なーるほど、納得。その心境、ぜひ手に入れたいもの、お互いに。

特別展示室にて　大沢昌助作品

第100回記念賞作品 寸評

池田佐知子
「心のフロシキ―立ち上がる―」
F100

池田 佐知子

大きなフォルムで捉えた唐草模様の風呂敷に包まれた荷物を背負う少女。非現実的な世界観のある作品。効果的な唐草模様。裂けた割れ目。少女の背負いきれない心の中が垣間みえる。今後も期待しています。（岩田　博）

石井晶子 「川原風景Ⅰ」 F100

石井 晶子

川原風景を近くに視点を置きながら奥行きのある空気感を出し、緑の豊かな色彩とともに川岸の白い面の効果もあり、伸びやかな筆触で心地よい佳作であると思う。（皆川　恵子）

伊藤須美 「Day trip」 F100

伊藤 須美

旅先での街並みの光景でしょうか、建物の構成と色調がリズミカルで美しく、心地よく響いてきます。単調な構図が少し気になりますが、淡いブルーと白、オレンジ等の配色バランスが効果的で好感の持てる作品です。（入佐　美南子）

伊藤真理子 「開示」 F100

伊藤 真理子

人体のフォルムと色面の構成が、大胆で力強い画面となっています。明暗のコントラストや色の配置が考慮され、魅力ある色調と形態で、作家の深い心象が表出されています。人体表現のさらなる展開を期待します。（入佐 美南子）

岩田一男 「月の雫Ⅲ」 F100

岩田 一男

視点が上から下に流れるように動き、雫の美が表現されている。作品中央のマチエール、グラデーションがとても綺麗に仕上がってる。具体的に描かれたモチーフ（船・貝）の効果はいまひとつ。作品を整理することでさらに雫の神秘性が生み出されるのでは。期待しています。（岩田　博）

冲永啓高 「悠久の流れの中にⅠ」
F100

冲永 啓高

画面の奥に作者のテーマである古代の事物が執拗に描かれ、その上に面白いマチエールの白で覆いわからないように意図的にしていることがこの作品の魅力であるが、未消化の部分もあり今後の展開に期待したい。（皆川 恵子）

第100回記念賞作品 寸評

川北美世子 「生命Ⅱ」 F100

川北 美世子

バックの無機質で幾何学的な線が、前方の有機的な物質の生命感を引き立たせている。またところどころに、全体の色調と違った赤い線が入っていて画面を引き締めている。地味だが美しい味わいのある作品である。（田浦 哲也）

髙橋和平 「2015・画室Ⅲ」 S80

髙橋 和平

足元を見おろした一見不思議なポーズの構成ですが、視点がユニークでインパクトのある作品です。画集に描かれた人物像のトリック的な要素や、床の表現、配置など、考慮された空間構成が印象に残ります。（入佐 美南子）

徳弘あずさ 「ある風景Ⅱ」 F100

徳弘 あずさ

心象風景とも見える作品。ホワイトとブラックの対照的な色彩で圧倒的なインパクト。また石横のブルーの色調が効果的に配置されている。今後の課題は、コラージュはやり方によって画面を汚す原因になります。汚さない様に進めてください。（岩田　博）

前橋伸哉 「在り方（Ⅰ）」 F80

前橋 伸哉

ある場所を除き全体的グレーをのせたことにより、描き伝えたいことを引き立たせ構成力を感じさせる作品になった。良くなるよう一部分にフラットでシャープな面と線を作ると良いと思います。（皆川 恵子）

山田雅子
「Decayed Log'（腐食した丸太）」
F100

山田 雅子

丹念に描き込んだマチエールが素晴らしい。よく見るとバックに使った青や紫が木の中にも少量使われていて、響きあって美しい。前回の作品もそうだが、私には古木が人の顔にも見える。私の深読みか、それとも意図的か。そこにも興味をそそられる。（田浦 哲也）

山田祐二 「窓辺（風のダンス）」 F100

山田 祐二

安全ピンは止められてこそ安全だが、この作品では止められていない。人形が細い糸の上を渡っている。晴れ晴れとした空とは裏腹に、先行き不安な現代社会を表しているように感じられる。砕けたガラス、ピンで止められた昆虫たちが、それを更に協調している。（田浦 哲也）

彫刻部　総評

100回展の展示に携わって

菅原二郎

第100回記念二科展が9月2日から14日まで国立新美術館において開催された。

今年の8月は今までにない酷暑となった。そのような中制作された作品群が搬入、入落審査、受賞投票を経て展示された。

搬入点数は昨年より少し上向き、また初出品者も多い印象を持った。今年は100回記念特別展示〝戦後二科を牽引した作家たち〟という東郷青児はじめ歴代理事長を含む絵画、彫刻23点が展示され、中でも彫刻は笠置季夫、淀井敏夫、堀内正和、小畠廣志、大平隆洋、倉沢實氏たちの懐かしい作品を眼にすることが出来た。

彫刻の展示スペースは、この特別展示のため、昨年より100㎡、合計200㎡余り減り、規格外作品の出品を辞退してもらったせいか大型作品が少なく、いくぶんさびしい印象を持った。

特別展示のない例年のスペースから一部屋分少なく、展示する作品は例年並みということで、展示委員たちは各部屋の性格、作品の大小、材質、傾向なども考慮しながら頭を悩まし構成していき、昨年に引き続き彫刻側と絵画側から野外展示場に行く休憩室に比較的小さな作品及び会員の巡回展用の作品を配置した。

全体の感じはベテラン作家達の安心して見られる作品、中堅作家たちの新しい試み、若手のフレッシュな作品、新しい傾向の作品など二科らしい作品展示になったように思う。野外展示はゆったりした展示となり、各作品がのびのびとしているように思った。

今年は初めての試みとして絵画、彫刻、デザイン、写真の四部でコラボレーション展が二階の休憩室で開かれた。コラボレーション展としては一考の余地があるように思ったが、四部がそれぞれの分野の特性を生かしながら一つの方向に向かおうとしている様子には好感を持てた。

彫刻部集合写真

会員になって ―制作の視点

正司　強

会員推挙をいただき身の引き締まる思いです。まだ何もしていないというのに自分の中で二科会会員という責任が日に日に大きく重たくなっていくのを感じます。改めて襟を正し彫刻家として精進していくと共に二科会会員としての責務を全うしていきたいです。

工藤　直

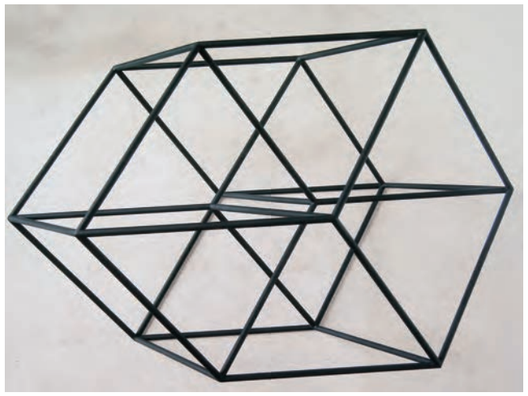
一旦作り始めるとできあがるまで一年近くかかるので、まずは自分自身が毎日楽しんで制作できること。そして展覧会で作品を見た人が笑顔になってくれたら作者冥利につきます。一作毎に新しい実験を試みながら元気で勢いのある若々しい彫刻を作り続けて行きたいと思います。

林　一平

作品を制作するのに到って同時に生き方についても考えてしまいます。なぜ自分は制作しているのか。なぜここに居るのか。初入選以来出品し続けて数々の考え方や生き方に遭遇、又は出会い、今もまだ続いています。一年一年繰り返す中で一つ一つの信念が生まれる。最近その様に感じられます。

受賞作品 ―制作の視点

ローマ賞　へんだがやの森　市川 明廣


文部科学大臣賞
交叉する８つの立体・平行四辺形(対称性のずれ)　吉田二郎

第100回記念賞　クロウ　森本 諒子

会員賞　風のゆくえ 2015　二ノ宮 裕子

第100回記念大賞　ビオトープ　林　一平

文部科学大臣賞　吉田二郎

台座から開放された立体の「在り方」を模索しています。上下、水平、表裏の区別なく、時には横になり、倒立することもできる。彫刻自身が中心(核)を持ち、外部の諸条件から彫刻を解放したい。又見ることのみの対象を越えて、手で触れ、乗ったり、座ったりしたくなるような形態でありたいと願っています。

ローマ賞　市川明廣

久しぶりに、淀井先生の『聖マントヒヒ』を観た。迫力、威厳は何処から生まれるのか。藝大学生時代先生のアトリエでみせて頂いたルオーの版画をふと思い出した。同じ会場の野外、私の『へんだがやの森』を観て、淀井先生は「君ねー、もうちょっと……」

第100回記念大賞　林　一平

木という素材が様々な人やモノを経由して自分と出会い、作り手の作業や思いを通じて鑑賞者の想いや記憶に影響を与えていく作品にしたいと制作しました。鑑賞者に自由な感じ方をして頂く為に、多様性のあるフォルム(人の様で生き物の様で)を探究しています。

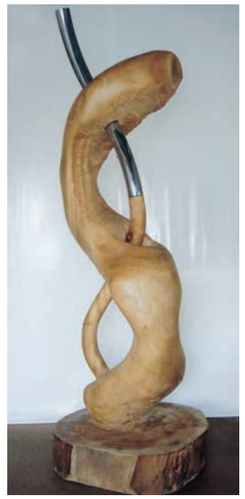
会員賞　二ノ宮 裕子

いつの世も、どんなときにも吹いて来る風だけは変わらず包み込み過ぎてゆきます。「風」を考察すると意のままにならない「えたいのしれないもの」と言えるのだそうです。「えたいのしれないもの」を慈しみながら誠実に作品に現したいと思っています。

第100回記念賞　森本 諒子

私は、大きな石を見ていると、一つ一つの石がゆっくりと動く生き物の様に感じます。この様なイメージを元に石という生き物を制作しようと考えました。土から栄養を吸い上げ、全身で呼吸をする。この作品は、私達には、止まっている様に見えて、気付かない程のスピードでゆっくりと動いているのです。

会友賞　貫馬　本多紀朗


会友賞　遥遥　服部 多加志

会友賞　見上げる　大塚邦博

特選　MIZARU KIKAZARU IWAZARU
浜田修子

彫刻の森美術館奨励賞　leeway　来栖　花

会友賞　僕をまつ せかい
山田 美智子

受賞作品寸評

会友賞　大塚 邦博

白い石膏像の大作である。見る人に強い生命力と女性の大地を包みこむような大らかな感じを受ける作品である。台座にひと工夫されるともっと魅力的なものになると思う。新たな具象の世界を創造して下さい。

（町川和司）

会友賞　服部 多加志

有機的な形がジグザグと緩やかに上昇し、それに対をなす幾何的な円柱（途中からスティンレス）が螺旋状に全体を引きしめ、はるか上へ伸びていく感じが良い作品である。有機的な形の三次元的な処理を考えると、意図がより明らかになると思います。

（吉田二郎）

会友賞　本多 紀朗

周りを圧倒する量塊と、野性的なフォルムの中を、鉄パイプがカーブし縄が這う。その馬の頭は、異形とユーモアが漂う。作者は「どう表現するか」という問いに苦しみながら、独自の形を求める夜を過ごしているのだろう。明けない夜はないと思う。

（橋本和明）

会友賞　山田 美智子

作者の優しい眼差しと、極めて厳しい観察と、執念にも似た粘りが、仕事の其処此処に姿を現す。「つくりたいという気持ちのみによって作りました。」透明で、澄んだ力が、母子という関係を超えて結実した秀作。無心な努力の積み重ねしか、このような仕事を生まない。

（神田毎実）

彫刻の森美術館奨励賞　来栖　花

作品の印象は、生物が呼吸して、血液が体中をめぐり脳や手や足を動かしているような生命感がある。生命体、有機体には様々な要素があり、それらがつながり機能している様をあえて石という硬く、無機質な素材を用いて柔らかい形態として表現している。

（前田耕成）

特選　浜田 修子

身体性の希薄化・透明化と増殖する虚飾。様々な価値の輻輳する現代に、「作者は何を視、何を聴き、何を思うのだろう。」スンナリとした印象の全体に在って、殊更に質量を思わせる、反り返った右足親指とその周辺、ふくらはぎと左足親指の戦いにこそ、作者の不器用な眼差しの行方を感じる。

（神田毎実）

新人奨励賞　Twin Tail　杉　亮介

特選　板と盆栽から大木を想像せしむることは可能か　町田　至

特選　メタルの女神　本多智雄

特選　本多 智雄

作品の題名と素材の両方が従来の彫刻の概念とは異なったユニークなものである。ステンレス、アルミという素材、網杓子と見て分かるような既製の台所用品などを駆使しての人体像である。一見、ターミネーターを連想する作風は細部に施された部位の捉え方も見事であるし、人体の持つ特徴を材質感と技術を活かして作り上げた作品である。メタルによる改造人物像である。

（西村貞雄）

特選　町田 至

樹齢百年のケヤキと盆栽をくらべることによって大木の姿を想像させるというコンセプト、板材をそのまま作品にした大胆な感覚は若さのたまもの。盆栽は館の都合で容器に入れられてしまった。作者の意図を大切にできる会場であってほしい。

（藤巻秀正）

新人奨励賞　杉　亮介

抑えられた彩色を纏った遠くを見つめる静謐な女性の胸像は、流行に敏感なアイドルの華やかな息吹も併せ持つ。若い作者の溌剌とした感性と才能が、清々しい爽やかな風を伴い光っている。次に出会う作品に期待は膨らむ。

（小林亮介）

新生二科を標榜して

百周年実行委員長　吉野　毅

「容器（入れもの）としての美術館が変わるだけではない。国立新美術館への移転に際し、新生二科とは何かと考えた時、いまの二科の現状を再検討し、修正していく事こそ、それではないかと考える。そしてこの移転を一つの好機と捉えた時いくつかのテーマが表れてくる。

○デザイン部、写真部との関係。

○将来（百周年）へ繋ぐ為の経営的改善。

○作品のレベルアップと展示の検討。」

これは平成十七年十月に開催された理事会で、国立新美術館実行委員会（以後委員会）から提言された文案の冒頭部分の抜粋である。この肩肘を張ったような文言は、理事会に対し委員会からの決意表明であり、あらゆる交渉権の委譲を要請したものである。出席したのは松任谷國子、松井敏郎両委員と私であった。

新生二科を標榜する上でデザイン、写真両部との関係は重要なものと考え、将来は同一法人でとの目標を掲げたのであるが、公益社団法人を選択しなければならなくなった時、いくつかのハードルがあり、現在はデザイン部と写真部はそれぞれ一般社団法人、絵画と彫刻で公益社団法人となっている。

平成十八年三月、デザイン、写真両部との全体会議を開催、四部門が初めてテーブルに着いたのである。多少緊張した雰囲気が漂う中で、展示室の割り振り、共有経費などを素直に話し合う。簡単に結論がでる議題ではなかったが、デザイン部、写真部、それぞれの思いを聞くことができ、四部門揃っての新生二科であることを、改めて確認し合う機会となった。その後個別での話し合いを重ね、十八年十一月の四部会議で、各部の部屋割り、デザイン、写真両部の参加費が合意されたのである。

二科展を運営する上で、経営の改善は重要な課題であった。他の団体との情報交換（二科さんはお金持ち。請求しただけ支払ってくれると複数の声）、業務内容の具体的な把握、外注費、外注業者の見直しなど、経費の削減につとめた。百周年と云う節目を、健康な組織で迎えたいとの思いが、委員会には強かったのである。

平成十九年九月五日、九十二回展が国立新美術館でオープンした。展示空間が変わるだけで、これほど変身できるものか、目を疑う光景であった。一年間の勉強の成果を見せ合う新装の土俵に四部門が初めて揃い踏みをしたのであった。

百周年委員会は、平成二十一年十二月に設置され、会員、会友から特別会費を徴収せずに、手づくりの百周年を目指したのである。

百周年記念事業として刊行したDVDと冊子は、福島賜與委員の献身的な努力によってできたものである。二科100年史は、二科70年史の執筆者である美術評論家・瀧悌三氏に、続編として執筆して頂いた。そして実務的に記念事業すべてを統括し、成し遂げてくれた事務局に心から感謝をしたい。

■ 授賞式　9月2日　国立新美術館3F講堂

内閣総理大臣賞　吉井英二

彫刻部会員賞　二ノ宮裕子

NIKA 100
2015 第100回 記念
二科展
event memo

■ 作品研究会　9月2日

研究会受付

■ 講演会　9月6日

「伝説の洋画家たち 二科100年展」でふりかえる二科展のあゆみ

石橋美術館学芸員 伊藤絵里子氏を囲んで

広報イベント

■ ギャラリートーク　絵画部　9月5日・6日・12日・13日　彫刻部　9月13日

9月5日

9月6日

9月6日

9月12日

9月13日

9月13日

9月13日

一昨年の4部会議において、第100回記念二科展特別展示として4部（絵画・彫刻・デザイン・写真）会員が同一テーマで作品を制作してみてはどうか？の一声によって「コラボ展示」は実現した。これは、まさに今年から4部が掲げることになった二科会趣旨に合致する。コラボという新しい領域が〝事象の地平面〟のように未知だからといって消極的姿勢の敬遠や否定に陥るのではなく、未知数であるからこそ新しい表現価値を見いだすための冒険心を持って不断の追究を行ったのである。

コラボ展示の準備期間は1年。この1年という期間は、総てがゼロから始まるコラボ展示としては短い。しかし、期間はコラボ展示企画のテーマとその規模によって補うことができる。規模としては2階の休憩室の利用で、最初としては相応しい展示サイズであった。

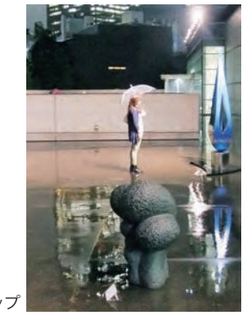
問題はコラボ展示作品のテーマである。コラボ展示委員会において、テーマは変に衒って難解なテーマにしないこと、そして何より参加会員が楽しんで作品を制作できることを考慮して、メインテーマの他にサブテーマを設けることとなった。両テーマとも数多くの案が出たが、最終的には単純明快（シンプル）で解りやすく、そして何よりジャンル（部門）を超えて参加してくれる会員が一作家として新感覚の柔軟な発想で自由に楽しめる作品創りという「新しい表現価値」のコンセプトで行こうとコラボ委員会は一致した。

そして、60日と2回のコラボ委員会会議の後、メインテーマ「遊び」サブテーマ「ネコ100態」が決定した。

斯くして、4部会員有志コラボ展示は、参加会員115名という予想を遙かに超えた人数となって大盛況の内に終わった。コラボ展示会場の賑わいと観客たちの溢れる笑顔、参加会員の楽しんで作品制作ができたとの感想に本展出品作品とは違ったコラボ展示の意義を感じてくれていた。これこそ、二科会趣旨の理念でもある「新しい表現価値」を感じとってくれたのだと確信した瞬間でもあった。

第101回二科展においても、コラボ展示は展示面積を増やして継続されることになった。更に、ジャンルを超えた新感覚・新表現の作品制作に挑戦して発表できる、そんな生長あるコラボ展示になればと願っている。

■ ナイトミュージアム
9月4日・11日



野外展示場ライトアップ

ミニコンサート　9月11日
出演：ヴァン・ドゥ・ラ・ムジーク

4部会員有志コラボ展示 報告

二科展4部コラボ展示実行委員会 委員長　堀川 佳英

作品抽選券の応募総数2751。会期終了後、当選者52名の方に猫作品、2,699名の方にはコラボ展示オリジナル絵葉書をお送りしました。
来期も4部有志コラボ企画を継続決定。次回テーマは!?

◆100周年記念事業実施報告

◆プレ記念事業
◇第98回展会場内に、岡本太郎の絵画作品のパネルと、太陽の塔写真パネルを展示。
◇第99回展会場内に東郷青児の絵画・彫刻を展示。

◆伝説の洋画家たち 二科100年展
◇主催
東京都美術館、大阪市立美術館、石橋美術館、産経新聞社、公益社団法人二科会
◇東京都美術館
2015年
7月18日～9月6日
大阪市立美術館
2015年
9月12日～11月1日
石橋美術館
2015年
11月7日～12月27日

◆第100回記念二科展
◇国立新美術館
2015年
9月2日～9月14日
◇デザイン部・写真部の特別展示室と、絵画と彫刻の物故作家の特別展示室を設ける。
◇記念祝賀パレード
◇第100回記念二科展祝賀会
○グランドハイアット東京
○ゲスト
ナターシャ・グジー
○アトラクション
和太鼓無限

◆100年周年記念刊行事業
◇二科100年史
（DVD・冊子セットと「続 二科史30年」）

100周年記念事業
担当理事・委員
※◎＝委員長　★＝コラボ委員）
担当理事（絵画）★生方純一、★川内悟、香川猛、大隈武夫、吉井浩、山中宣明、中島敏明
（彫刻）◎★吉野毅、島田紘二呂
委員（絵画）加覧裕子、森岡謙二、寺田眞、横前秀幸
（彫刻）福島賜與
事務局　★塙珠世、★安田明長

第100回記念二科展　新潟巡回展報告

新潟支部長　藤田 由明

第100回記念二科展の巡回展は全国八会場を巡回しますが、その皮切りが新潟です。

政令指定都市新潟市の県民会館ギャラリーにて9月20日より10日間にわたって盛大に開催されました。

初日には、田中理事長、香川理事、彫刻の工藤・日高参与、塙事務局長らが駆けつけ新潟の青空をいっそう輝かすことができました。

開場式で、理事長は地元新聞社と並ぶ主催者として挨拶され、二科の真髄を広く県下に喧伝されました。

巡回作品（絵画114点、彫刻10点）に新潟関係の絵画彫刻79点を加えた計203点に、観覧者からの称賛の声も高く、二科の歴史に新しい頁を残しました。

最終日には、生方常務理事がお出でになり新潟に力強いエールを送っていただきました。

入場者数約7,000人という記録更新が、新潟巡回展の大成功を物語っています。

神奈川　長崎　熊本　福岡　宮崎　パレードの出発

新潟

広島

宮城

滋賀

千葉

愛知

山梨

鹿児島

支部だより

記念祝賀パレード

神奈川

長崎

東京

長野

会場グランドハイアット東京までもうすぐ…

秋田

大阪テーブル

田中、生方、香川先生を囲んで

千葉テーブル

第100回記念 二科巡回展

- **新潟展**　平成27年9月20日～29日　新潟県民会館
- **東海展**　平成27年10月6日～12日　愛知県美術館ギャラリー
- **大阪展**　平成27年10月27日～11月8日　大阪市立美術館
- **京都展**　平成27年11月24日～12月6日　京都市美術館
- **広島展**　平成28年1月5日～10日　広島県立美術館
- **鹿児島展**　平成28年3月11日～20日　鹿児島県歴史資料センター　黎明館
- **熊本展**　平成28年4月5日～17日　熊本県立美術館
- **福岡展**　平成28年4月19日～24日　福岡市美術館

第100回記念二科展を終えて

一般社団法人二科会デザイン部　理事長　今村昭秀

第100回記念二科展に先駆けて東京都美術館で開催された、日本美術の開拓者たちがここに集う「伝説の洋画家たち　二科100年展」を観て、そこに展示されていた日本美術史上の傑作といわれる作品群に、二科展の歴史はそのまま日本の近代・現代美術の歴史でもあることを改めて実感しました。そんな歴史や伝統ある二科展に現在のデザイン部である商業美術部門が創設されたのは65年前でした。デザイン部としては今回が65回展となります。第100回記念二科展はデザイン部の65回展という節目の年でもありますから、祝第100回記念二科展をテーマとするポスターをデザイン部会員が制作展示しました。これは歴史とか伝統は時代がどう変化しても現在は過去の続きであり、過去、現在、未来へと巡り続けることで歴史や伝統になるわけですから、100回展を迎えた二科展も過去の栄光に甘えることなく、これからも変らない強さと変わる強さとその先進性で人と人、人と作品をつなげ伝える、絵画、彫刻、デザイン、写真部で構成展示される二科展の魅力をポスターで表現したものです。どんなに時代が変っても、そこには変らない二科精神、二科スピリッツがあるから、あったからこそ「これまでも」「これからも」持続していくわけですから、この持続性こそが一過性のコンペやコンクールとは違う公募展である二科展の特長であり、魅力でもあることを第100回記念展を迎えた今回改めて強くしました。長い間、公益社団法人二科会に依存してきたデザイン部も一般社団法人化し、自立したことですから、よりデザイン部の独自性と魅力を二科展に付加していきたいと思います。デザイン部も二科会趣旨にある二科スピリッツをつなげ、伝えていくべく心を新たにしています。

デザイン部　会場風景

二科展100年の重み

一般社団法人二科会写真部　事務局長　片岡順一

今年「二科展」は第100回記念展を迎えました。美術への志を高く掲げて二科会を創設してから100年間にわたって展覧会を継続してこられたことに、改めて敬服いたしました。

そして「二科展」が積み重ねて来た歴史と伝統に100年の重みが加わりました。展覧会開催を担った多くの方々の熱い情熱と努力によって培われた信頼と価値など、様々な実績がその重みとなっています。

「第63回二科会写真部展」では、会員・会友作品及び公募作品1350点を展示しました。他に第100回記念展の試みとして「4部門会員有志コラボ展示」があり、写真部会員からも「ネコ100態」に多数のネコ写真が寄せられました。写真部では事前にコラボ展示への理解を深めるため、4部門の記念展及びコラボ展示の実行委員の方々に参加していただいて、写真部広報誌『REAL』で座談会を行いました。ご協力に御礼申し上げます。

「第100回記念二科展」特別展示では、写真部は全国47支部から「未来」をイメージした写真を募集し、未来へつなぎたい日本の「いま」を特大パネル9枚に構成して展示、同時にテレビモニタを使用して「未来への扉」となる動く映像表現を展開しました。

二科展は第100回の節目を迎え、また未来へ向けての第一歩となりますが、二科会写真部は新体制による新たなスタートとなります。今後は、全国の会員・会友が一丸となって二科展と写真部のさらなる伸展に努力してまいる所存です。

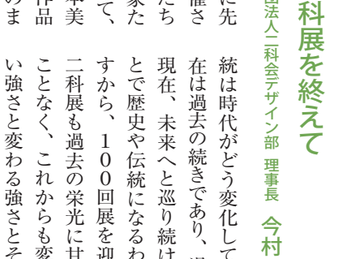
写真部　会場風景

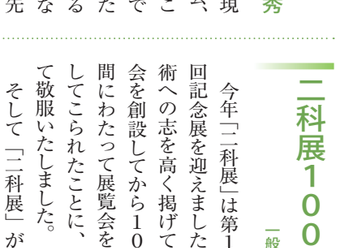
■審査会にて

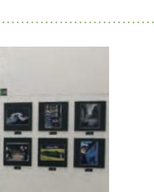
◇今期も出品規約外の号数、額装などの出品で、審査対象外となったり、受賞、入選が取り消されるなど、注意を要する作品があった。審査の進行中には判断が付け難く、出品者の制作の姿勢を問わなくてはならない作品があることは残念だ。各支部では個々状況を把握していることもあるかと思われるが、見極めが難しい。制作者として表現の独自性を信頼する前提で審査に当たっているが、情報の速さ、広さ、テクノロジーの高度化の時代、難しくなった問題が感じられる。

◇4日間にわたる審査会は平均年齢の高い会員諸氏には厳しい。今期は新会員がインストラクターとなってのストレッチタイムがあり、一斉に立ち上がって体を伸ばし身体と気分のリフレッシュをした。

◇非公認キャラ・ニカット君登場。絵画部関西某会員勝手連企画、昔の二科前夜祭名物の仮装をアレンジした手作りブローチ？缶バッチ顔のニカット君人形が、審査中の会員の胸元でいち早く記念展気分を盛り上げるのに一役買った。自主、手作り100周年参加。


絵画部　搬入受付風景





企画　田川絵里
制作　古保木雄一

春季二科展
平成28年4月17日
～23日
東京都美術館

訃報

名誉理事　栗山　淳　氏

二〇一五年八月二十一日逝去
享年84歳
ご遺族　栗山浩之氏（長男）
〒三〇〇―一三二六
茨城県稲敷郡川内町宮淵
二七二
略歴
一九三〇年　茨城県生まれ
第51回展初入選
第54回展特選
第55回展会友推挙
第57回展会友特賞
第59回展会員推挙
第62回展会員努力賞
第88回展内閣総理大臣賞

利根川緑地　F100
第99回展出品作

栗山淳さんを偲んで

大隈武夫

先生とは上野の都美術館で入場者の切符切り、絵はがきの販売、入場券のツリ銭の両替に山下の銀行に行ったこと、入選者発表の新聞社廻りなど色々なことが思い出されます。

私が事務長の時は栗山先生、高野先生と毎月の会計整理、展覧会の事務、又、当時の事務員の高山さんが辞められた時は二科展の事務、交渉等をお互いに助け合い、春季展を松屋で毎年開催し、3人とも毎日出勤で、秋の二科展では三十日間連続出勤でした。宮内庁、御所、上野の森美術館、安田火災との交渉等も、新しい事務員で大変でした。

栗山先生は理事長の淀井先生、鶴岡先生のもと事務長を誠実に着実に進められました。心よりご冥福をお祈り申します。

訃報

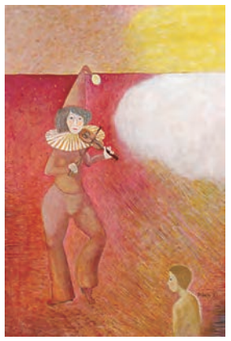
会友　西峯　多木治　氏

二〇一五年九月八日逝去
享年85歳
略歴
第73回展日本美術協会賞
第75回展会友推挙

訃報

会員　末光　利夫　氏

二〇一五年七月十一日逝去
享年85歳
ご遺族　末光琢広氏（長男）
〒二三四―〇〇五一
神奈川県横浜市港南区
日野三四―二九〇九
略歴
第38回展初入選
第53回展明治百年記念賞
第55回展会友推挙
第56回展金賞
第69回展会員推挙
第82回展会員努力賞


大道芸人　F100
第97回展出品作

末光利夫さんを悼む

香川　猛

今年の七月、出品する作品制作に勤しんでいる時、支部事務局より、末光さんの訃報を知らされた。突然の事で、驚きと悲しみと残念さとで複雑な気持ちが胸を痛めた。

末光さんは私よりずっと先輩で兄貴分の存在でした。あまり表舞台には出たがらない地味な人柄でしたが、庶民的で飾り気のないところが私は好きでした。絵の話より、友人と飲んで楽しんだ（脱線）話をよくしてくれた。スポーツマンで読書家、文武両道の人でした。

若い頃、織田先生に師事し、書生として油絵の研鑽に勉めた。晩年は人生体験を物語風にまとめた心温まるユニークな絵を描かれていた。もっと長生きをして、素晴らしい絵を描き続けてほしかった。惜しい人を亡くしてしまったが、愛娘の恵子さん（神奈川支部）が継承発展してくれることを祈るばかりです。（谷掌）

訃報

会員　佐藤　成一　氏

二〇一五年八月二十二日逝去
享年76歳
ご遺族　佐藤純子氏（長女）
〒三一四―〇〇一二
茨城県鹿嶋市平井一三四五―七
略歴
服部正一郎先生に師事
第47回展銀賞
第48回展会友推挙
第50回展文部大臣賞
第57回展会員推挙
第63回展パリ賞

黒潮　P100　第89回展出品作

第92回二科展より休会されてご療養中でしたが、逝去されました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2016春季二科展　選抜出品予定者

絵画部
（会友）大岩万里子［東京］
田中　壽美［千葉］
山下　進弘［和歌山］
中島　薫［新潟］
太田　広信［富山］
岩田　一男［山口］
川北美世子［神奈川］
田村　忠男［新潟］
中村　紘子［東京］
新川　久子［岐阜］
畑　すづ子［三重］
山田　祐二［新潟］
（一般）池田佐知子［富山］
石井　晶子［神奈川］
石川由巳子［宮城］
石原琢二郎［鹿児島］
伊藤　須美［兵庫］
稲村　博子［神奈川］
遠藤　学［千葉］
沖永　啓高［東京］
加持　友子［滋賀］
倉橋　榮子［神奈川］
倉本　郁夫［広島］
河本恭加子［滋賀］
佐々木俊明［広島］
佐藤　幸光［東京］
髙橋　和平［宮崎］
中村百合江［東京］
羽根真実子［福島］
平林　直哉［鹿児島］
福島　菜菜［京都］
前橋　伸哉［東京］
南　満喜子［神奈川］
茂木　拓［福島］
森井るみ子［京都］
康本　節子［大阪］
吉村彩菜恵［石川］
若狭　洋子［滋賀］

彫刻部
（会友）大塚　邦博［東京］
服部多加志［東京］
本多　紀朗［大阪］
山田美智子［神奈川］
（一般）森本　諒子［山形］
来栖　花［山形］
浜田　修子［東京］
本田　智雄［茨城］
町田　至［山形］
杉　亮介［神奈川］

チャリティー報告

4部の作品寄贈協力会員も増え、コラボ企画の流れもあって楽しい作品が並び、二科展らしいコーナーとして賑わいました。皆様のご協力によって、今年も収益の全額を寄付することができましたことをご報告いたします。

■NHK厚生文化事業団
500，000円

■南相馬市災害対策本部
581，000円

会場には、これまでの活動をまとめたパネル〈公益社団法人二科会 義援活動のあゆみ〉(左図)を掲示しました。

今期も例年通り絵葉書と切手のセットを絆通信とし福島県南相馬市原町区仮設住宅143戸・鹿島区仮設住宅1007戸、合計1150戸にお送りいたしました。

ご支援に心より感謝し、今後とも活動を継続してまいります。

■ベストセレクション展

来年5月に開催される東京都美術館主催の「公募団体ベストセレクション美術2016」展の出品作家7名が、会期中に開かれた理事会で選出された。絵画部会員：吉井英二、五味祥子、寺田眞、竹内幸子
彫刻部：島田紘一呂、市川明廣、本多智雄

二科ショップ

100回記念展のショップでは、作品集、絵はがきに並んで記念二科展グッズを販売しました。揃いの二科Tシャツはパレードの必需アイテムということもあって早々の品薄状態。エコバック、伝説の洋画家たちのクリアファイル、二科100年史セット、記念展の賑わいがショップにもおよぶ盛況でした。絵葉書スタンドがはいって売り場がまとめやすくなっていたと思われます。

ショップ・チャリティーコーナー

事務局だより

天皇皇后両陛下に行幸啓戴いた、東京都美術館での「伝説の洋画家たち 二科100年展」と会期が5日間重なって迎えた、国立新美術館での第100回記念二科展は、表1・2・3に表れていますように、活気のある展覧会となりました。

過去100年の受賞歴が巻末で賞別に一覧できる金色の作品集は、昨年より増刷いたしましたが完売。又、再入場券と共に印刷された、「伝説の洋画家たち 二科100年展」のご案内や「コラボ展示作品抽選券」は各担当者の多大なるご協力のお陰で好評を戴けたようです。「大盛況！良かった！」の声の裏には委員会の先生方や、進んでその任をお引き受け下さった先生方の多大なるお力や、地道な作業を黙々とこなす事務局スタッフの総力によるものと心から感謝いたします。

9月10日開催の4部門会議において大好評であったコラボ展示を来年も継続する事が決まりました。会員の先生方の尚一層のご参加、ご協力、宜しくお願いいたします。

事務局では日本美術史の礎ともなり、100年目を迎えた美術団体二科会を、一人でも多くの方に知っていただきたいとの思いで、総力を挙げて制作してきた「二科100年史」の本とDVDセットは国立国会図書館を始め、図書館が併設されている美術館等に、「伝説の洋画家たち」の赤い本は美術系高校や大学等の図書館宛てに、展覧会終了後お送りいたしました。

祝賀会に向かう華やかなパレードでは、支部長を中心とした各支部の結束力を垣間見る思いでした。二科会は全国の支部を母体とする組織です。本部と支部とのコミュニケーションをより密にし、規約についての共通認識を深めて、規約遵守の徹底を図り、相互の円滑な連携を以て101回展に向かっていきたいと思います。

会場のあちらこちらで目にした「NIKA100」の文字。この歴史的な第100回記念二科展という節目の年を、常に広くお心配り下さった田中理事長の許で迎えられた事に心より感謝申し上げます。

事務局長　塙　珠世

表1

	入場者(昨年比)
一般当日	5,168人　(536増)
前売り券入場	5,143人　(98増)
高校・大学	538人　(188増)
チラシ割引	1,074人　(395増)
チケットぴあ	188人　(51増)
団体割引	34人　(34増)
企画割引	37人　(574減)
新聞社優待券	2,790人　(449減)
有料入場者	14,972人　(279増)
無料入場者	87,440人　(7,246増)
入場者合計	102,412人　(7,525増)

表2

区分	搬入点数(昨年比)
絵画・一般	2,978点 (198増)
絵画・会友	1,166点 (102増)
彫刻・一般	65点　(4増)
彫刻・会友	38点　(±0)
合計	4,247点 (304増)

表3

展示(遺作含む)	点数(昨年比)	人数(昨年比)	35才以下出品者数(昨年比)	35才以下応募・在籍数(昨年比)
絵画・一般	738　(41増)	717　(41増)	69名 (19増)	80 名　(7増)
絵画・会友	354　(34増)	276　(11増)	11名　(2増)	11 名　(2増)
絵画・会員	172　(27増)	151　(6増)	0名　(0)	
彫刻・一般	59　(6増)	59　(6増)	22名　(3増)	23 名　(2増)
彫刻・会友	38　(±0)	38　(±0)	4名　(1増)	4 名　(1減)
彫刻・会員	84　(24増)	50　(±0)	0名　(0)	
展示合計	1,445 (132増)	1,291 (64増)	106名 (25増)	118名　(10増)

(100回記念特別展示を除く)

編集後記

いよいよ第100回の節目を迎えた二科会、記念展は、引き続き巡回各地で開催中。◇全国公募団体として各地支部、出品者の活況あっての二科展、今回の祝賀パレードに思い思いの特色をだしながら参加する各地の表情を紹介し、今後の支部活動、支部だよりのページの先駆けとしました。今後、各地支部長、同人各位のご参加をお願いします。◇さらなる101回へ継続する展望を得るため、国立新美術館への会場移転から今期の記念展に至る経緯の総括を、実行委員長である彫刻部吉野毅理事に「新生二科を標榜して」として寄稿いただきました。時の中でまた新生二科の模索は続きます。◇長い準備期間をかけた特別企画や催事の、常にましての賑わいを紙面にと目指しましたが、多様なシーンの構成が収まらず、とにかく画像満載の記念展号ということで。(N)

編集委員
委員長 (絵) 野村 みそら
委員 (絵) 本間 千恵子
〃 〃 深見 まさ子
〃 〃 金澤 英亮
〃 〃 (彫) 幡 青果
〃 宮澤 光造

平成二十七年十一月一日発行
公益社団法人 二科会
〒160－0022 東京都新宿区新宿4－3－15 レイフラット新宿 501号室
電話 03(3354)6646
FAX 03(3354)4768

★ 二科ニュースweb入稿用アドレス：newsnika@gmail.com